

## [007\_1981]第七回中央図書館貴重文物展観目録 : 17 世紀後半～18世紀ヨーロッパ製アジア図

九州大学附属図書館中央図書館

小野, 菊雄  
九州大学教養部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1485004>

---

出版情報 : 大学広報. 423, pp.1-10, 1981-11-09. The Committee of Public Relations Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

# 大学広報

No.423

昭和56年11月9日発行

(編集)  
九州大学広報委員会

## 第七回中央図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

### 17世紀後半～18世紀ヨーロッパ製アジア図

#### はじめに

長沼文庫など本学附属図書館所蔵のヨーロッパ製古地図のうち、今回は主にアジア地方図を展示した。アジアの一隅に描かれる日本の形状には、いくつかのタイプがみられるほか、その北方地域に関しては、実に多様な姿が示されている点は興味深いところである。

教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

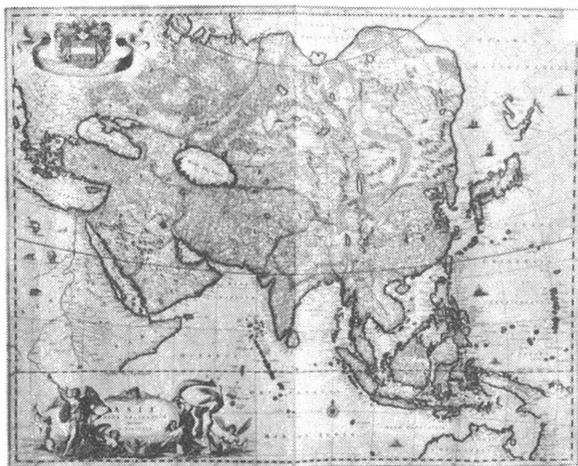
なお、前回にひきつづき展示地図の選定、解説、配列等について教養部小野菊雄教授に多大の御尽力と御指導を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

#### 記

場 所 : 中央図書館メインロビー

期 間 : 昭和56年11月9日(月)から11月30日(月)まで

展 観 資 料 の 解 説



アジア図 N. Visscher 17世紀後半 アムステルダム

オランダの地図製作者N. Visscher<sup>フィッシャー</sup>(1618-79頃)による色彩の鮮やかなこの地図は、<sup>テイセラ</sup>Teixera型の日本、1643年のM. Vries<sup>フリース</sup>の報告による「YEDSO」などの形、翌年のA.<sup>タスマン</sup>Tasmanの探検にもとづくオーストラリア北岸からニューギニア付近の形など、17世紀のオランダ最大の地図出版者<sup>ブラウ</sup>Blaeu家<sup>ヨアン</sup>のJoan(1596-1673)による「新世界全図」(1648)のアジア地方の形状をうけついでいる。もっとも、Visscherはアジア北東部の北へのはり出しをかなり小さくしたりするなど若干の修正をおこなっている。

なお、この図の内陸に無数の点で細長い帯状に示しているのは砂漠であって、「Xamo Desertum」と記してあるうちの「Xamo」は砂漠の中国語音であり、この表現法が中国から伝えられたことを示すものといわれる。また、カスピ海は古くからの横長の形で描かれ、ボルガ川下流の都市サライによるとみられる「MARE DE SALA」(サラの海)の名称が記されている。

大タルタリア、大モンゴル帝国、日本およびシナ図

F. de Wit 1660年 アムステルダム

F. de Wit (1616-98) は、1648年アムステルダムに仕事場を設け、1670年頃から世界地図帖などを刊行した地図出版者であるが、その事業は彼の息子と孫を経て、1706年 P. Mortier へ、さらにその後 J. Covens と C. Mortier へと引きつがれたのである。

この図をみると、Blaeu の流れを汲む N. Visscher のアジア図のうちの当該地域とかなり類似している。たゞ、Visscher の日本は Teixeira 型であるのに対して、この図のそれは異なる形を示している。すなわち、中央が少し突出した東北北岸、南に長い房総半島、琵琶湖と大阪湾の直接的なつながり方、東にある三つの島々などがみられるのであるが、これは 1650年フランス人宣教師 Briet がポルトガル人宣教師 Cardim の著書所収の地図をもとに作成した日本図によっているためであり、この Briet 図の源流は、桃山時代に屏風に描かれた日本図に求めることができるのである。また、この図ではアジア北東部の北へのはり出しは全くなく、その部分の海岸線はなめらかな曲線で描かれている。

そのほか、カスピ海にはサラ、バクーと三通りの名称が記してあり、アジア北東部には、旧約聖書に登場し、中世ではアレクサンダー大王が遠征の際にアジアの果ての地に閉じ込めたとして、地図のその部分に描かれた魔物「MAGOG」が地名の形で記されている。



アジア図 A. H. Jaillot 17世紀末 パリ

A. H. Jaillot (1632-1712) は、フランスの有名な地図製作者 N. Sanson (1600-67) とその息子たちによる地図資料をもとに、1670年から地図製作に従事した人物であ

り、従って、この図の日本も Sanson が採り入れた Briet 型のものになっている。

この図の日本の北には大陸から南へ長くのびた半島があるが、その東岸や南岸にはサハリ  
ン南東岸、北海道東岸から南岸の形状が描かれている。しかし、こゝにはエゾの名称はなく、  
それは「Etats」島(エトロフ)の東に広がる土地に「TERRE DE IESSO」「IECO」と  
して登場するのであり、しかもその土地は北アメリカの一部のように描かれているのである。  
なお、1690年のイタリアのV. M. Coronelli<sup>コロネリ</sup>の「東アジア図」なども大陸の半島とエゾの  
関係はこの図と同じであり、また、この図には18世紀になると出てくるカムチャッカ半島  
がまだみられないことなどから、この作品は17世紀末のものと同推測される。ただし、アジ  
ア北東の海にカムチャッカを思わせる「KAIMACHITES」という名称があることを考える  
と、18世紀当初としても妥当かもしれない。

そのほか、この図には前紀の半島北部やその西には「YUPI」「NIUCHE」などアムール  
川流域の民族を意味する名称がみられ、また、アジア北東部には旧約聖書に登場する魔物  
「MAGOG」「GOG」の名がある。

#### インドおよびシナ図 J. Covens, C. Mortier

18世紀前半(17世紀末) アムステルダム

コーフェン<sup>コーフェン</sup>とモルチエ<sup>モルチエ</sup>は、1730年(20年?) P. Mertier の事業をうけつぎ、18  
世紀のヨーロッパで広くその名を知られるようになったオランダの地図出版者である。彼ら  
はフランスの地図製作者の作品を多く手掛けたが、この図はそのうちのG. Delisle<sup>ドリル</sup>(1675-  
1726)のものである。

この図の日本はM. Martini<sup>マルチニ</sup>型の形であるが、その北にはJaillet 図と同様に東そして南  
へのびる半島があり、そこに「Yeco」や「Eso」の名称、また「MATSMY」「Acqueis」  
「Tocaptie」つまり松前、厚岸、十勝とみられる地名がある。すなわち、この図では北海道  
が大陸の半島となり、「Etats」島の東には「会社の土地」が広がっているのであるが、形  
の上ではJaillet 図と似ているものの地名の配置が異なっているこのタイプは、例えばオラ  
ンダのN. Witsen<sup>ウィットセン</sup>(1641-1717)の「大タタル新図」(1692)などにもみられる。も  
っとも、Witsen は「Yeco」を明確に半島として描いているが、この図では「Yeco」の土  
地が「Japon」とつながっているかどうかは不明だとして、半島の先端をあいまいに表現し  
ている。なお、アジア北東部はこの図の範囲外になるため、カムチャッカの知識に関しては  
不明であるが、Jaillet 図や前記のWitsen 図などくらべてみると、内容的には17世紀

末頃の知識を盛つた作品ではないかと推測される。

アジア図 J. B. Homann 18世紀初め ニューレンベルク

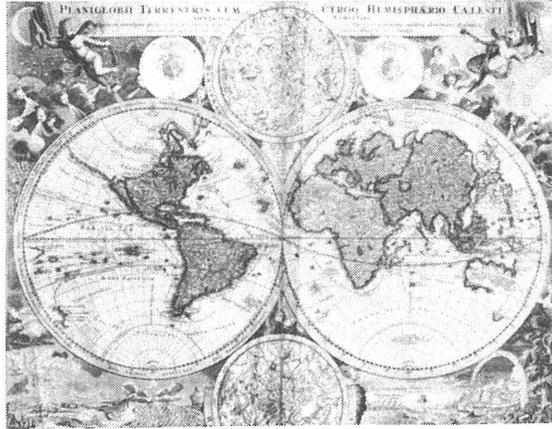
アジア図 G. Matthias Seutter 18世紀初め(1710年?) アウグスブルク

J. B. Homann<sup>ホーマン</sup>(1663-1724)は、1702年ニューレンベルクに地図出版所を設立、以後多くの地図を刊行したことで有名であり、Matthias Seutter<sup>マチアス ゾイター</sup>(1678-1757)は、1707年アウグスブルクに仕事場を設け、弟Matheus<sup>マテウス</sup>と共に多数の地図を作成した人物である。

左のHomann、右のSeutterの二つのアジア図は非常によく似ているが、これは後者が前者の弟子であり、師の作品を主に出版したこともよっている。例えば、日本は両図ともBriet型の形を示し、その北にあるサハリン南東部と北海道を一つにした「YEDSO」も、当時の他の地図と少し違って、どちらもいわばずんぐりした形になっている。

なお、両図でニューギニア北東にある「NOVA BRITAN(N)IA」は、イギリス人W. Dampier<sup>ダンピア</sup>が1700年に到達したニューブリテン島であり、また、アジア北東の北極圏を示す緯度付近に東へ突出する細長い「Caput Glaciale」(氷の岬)半島は、17世紀末から1720年代初め頃まで地図上に見受けられるもので、これらの点から両図の作成年代が大体推測できる。

ところで、よく似ているこの二つの地図にも若干の違いがある。すなわち、Homann図ではやゝ円形のカスピ海に対して、Seutter図ではそれは南北に長く、さらにその北東には付近に「Aralkoy」の地名がある小さい湖(アラル海?)がある。また、Seutter図ではキプロス島や北のノバゼムリヤが半島になっているが、ノバゼムリヤ「半島」は、例えば1730年のP. J. Strahlenberg<sup>ストラレンベルク</sup>のシベリア地図などにもみられる。

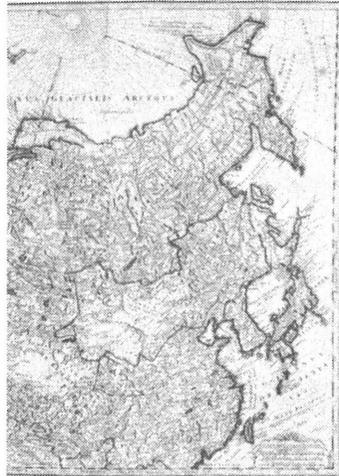


大地の両半球図および両天球図 J. B. Homann

18世紀初め ニュールンベルク

J. B. Homannが東西両半球で示したこの世界図は、全体的には1648年のJ. Blaeuの「新世界全図」(両半球図)に似ているが、たゞ日本とその北の部分は全く異なっている。すなわちこの図では日本の北の「TERRA IEDSO」が「IAPONIA」つまり日本とも連続しているのであり、しかもその日本の形はかなり変形している。また、左の西半球図では、<sup>ホアン・ダ・ガマ</sup>J. da Gamaがその沿岸を航行した旨の説明と共に「TERRA ESONIS」の海岸を東へのばし、カリフォルニア「島」付近でやゝあいまいながらも北アメリカとつないでいる。このようにエゾと北アメリカを関連させる描写は、1713年のV. O. <sup>キプリアノフ</sup>Kiprianov、1733年のJ. G. <sup>ドッペルマイヤー</sup>Doppelmayrの地図などにもみられるものである。

なお、この図には<sup>マゼラン</sup>F. Magellan、A. Tasman、W. Dampierなどの探検航路が点線で示されており、Dampierが1700年に到達したニューブリテン島も描かれているので、この図の作成は18世紀初めの頃と推定できる。



ロシア帝国および全タタール図 J. M. Hasse(Hasius) 1739年 ニュールンベルク

J. Hasse<sup>ハッセ</sup>(1684-1742)は、ヴィテンベルクの数学教授であるが、Homannの地図出版にも協力し、投影法などの論文を書いたり、多数の地図を作成した人物である。

この図の日本は、中央が湾入した東北北岸とその北の「Matmaska」(松前)島や四国北岸の形などからみて、<sup>ケンペル</sup> Kaepter・<sup>ジョイヒツエル</sup> Scheuchzer型である。その日本の北には南北に非常に長い「Eso. YEDSO Oku Yeso」の地があり、この地の南部には北海道にあたる「YEsO Gasima」の名称もみえる。なお、「Oku Yeso」(奥エゾ)は江戸時代のカラフト(サハリン)および南千島に対する呼称であるが、「Eso・・・」の地が南北に長く描かれ、その北部の奥エゾ(カラフト)がアムール川河口のサハリン島に接近している点は注目される。この二つの土地が近いという点では、1733年や40年のJ. N. <sup>ドリル</sup> Delisle(1688-1768)の地図と似ているが、しかしHasse図は「Eso・・・」の地の北西部を明らかに大陸と連続させている、すなわちこの地を大陸の半島として描いている点でDelisle図と異なっている。この点は、日本の北に「Jesogasima」島、アムール川河口にサハリン島を描き、大陸沿岸にサハリン南東部の海岸線を描いた1752年のJ. B. d' <sup>ダンビル</sup> Anvilleのアジア図、サハリンは島でカラフトは大陸の半島とした林子平の地図(1785)や近藤重蔵の地図(1804)を想起させるものである。  
天明5 文化元

そのほか、この図のアジア北東部には北と東に突出した二つの半島が描かれているが、これはピョートルI世の命をうけて1728年カムチャッカ東岸を北上し、アジアとアメリカをわける海峽付近まで航海した<sup>ベーリング</sup> V. Beringの報告にもとづくもので、1730年頃からロシア製

の地図などに登場してくる形である。また、この図ではSeutterのアジア図と同様にノバヤゼムリヤは半島となっている。

ロシア帝国および大タタール図 **F. L. Güssefeld** 1786年 ニュールンベルク

<sup>ギューッセフェルト</sup>  
F. L. Güssefeldは18世紀末から19世紀初めにかけてのドイツの地図製作者であり、この図はHomannの出版所から刊行されている。

この図の日本はKaempfer・Scheuchzer型であるが、その北には北海道の渡島半島の部分だけの「Matsumay」島がある。たゞ、その北東の「Konosir」島(クナシリ)からカムチャツカまでの千島の島々は比較的正しく並んでおり、また、カムチャツカの東にはアリュシャン列島も示されている。そのほか、アムール川河口にはサハリン島があるが、その南の大陸沿岸には、先端に「Aniwa」岬のある半島つまりサハリン南東部の海岸線が描かれている。

18世紀末のこの地図をみると、カスピ海、アラル海とそれに注ぐ二つの河川、北のノバヤゼムリヤ、アジア北東部の形などもかなり正しく示されるようになってはいるが、日本の北方地域に関しては依然として不明確であつたことがわかる。

アジア図 **Lamarche** 18世紀中頃(?) パリ(?)

アジア図 **R. Bonne** 18世紀末 パリ(?)

両図ともにフランスで作成されたアジア図であるが、左のLamarche<sup>ラマルシェ</sup>図の方は、SansonやJailletの資料をもとに18世紀中頃地図帖などを刊行したフランスのG. R. de Vaugon<sup>グォゴディ</sup>-<sup>ボンヌ</sup>dy(1688-1766)の作品を修正したものである。右のBonne<sup>ボンヌ</sup>図には、左上の「M. BONNE」のあとに「海軍水路技師」とあるが、1752年に地図投影法の一つであるボンヌ図法を考案したRigobert Bonne(1727-94)が水路学者で技師であつたことを考えると、「M. BONNE」はBonne氏、すなわちこの図の作者をR. Bonneとみてもよいであろう。なお、両図ともにボンヌ図法によって描かれている。

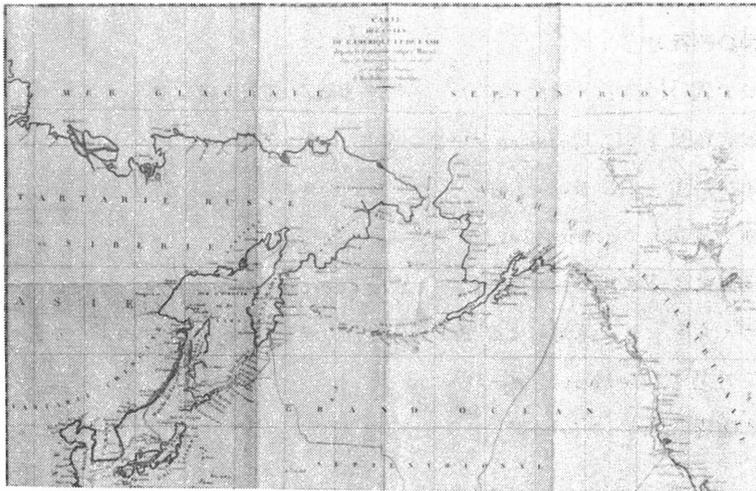
両図の日本は、Bonne図は少し形が乱れてはいるが、いずれもKaempfer・Scheuchzer型である。しかし、その北方は異なっており、Lamarche図では、北に「く」の字型の「Amur」島(サハリン)、その南に西岸を点線で示した「Jeso」、その東に「Etats」島(エトロフ)や島の形には明示していない「会社の土地」がみられる。一方、Bonne図では、サハリン島の南の大陸が長方形の半島として突出し、その沿岸にサハリン南東部の海岸線が示され

ており、北海道は南千島と一緒に「Jeso」諸島のうちの一つの島として描かれている。

また、Lamarche 図のアジア北東部は、1728年のBeringの探検航海の成果を示しているのに対して、Bonne 図では、アジア北東部のチュコト半島、アラスカ、アリューシャンの島々などがかなり正確に示されているが、これは、1778-79年にこの海域を探検調査したイギリスの有名な航海者J. Cookが作成したすぐれた海図をほぼそのまま取り入れているからである。また、オーストラリア東岸やニューギニアとの間の海峡が明示されている点やその東のニューヘブリデスやニューカレドニアの存在などもCookの探検によるものである。

もっとも、Bonne 図には日本の東方海上に「Rica de Oro」「Rica de Plata」という金の島、銀の島がみられる。これは、最初はMarco Poloにより日本にあてられていた「黄金の国」が、いわば東へ移動したものであり、17世紀前半オランダ東インド会社が北太平洋に船隊を派遣したのは、この島々を探索するためでもあった。金銀の島が19世紀末の地図に未だにみられるのは興味深いところである。

なお、Bonne 図の子午線の度数は、上方はカナリア諸島のフェロ（イエロ）島を基準とし、下方はパリを基準としているが、フェロ島を基準とする方法は1634年にはじまり、1800年頃までフランスの地図に使われたものである。



アメリカおよびアジア沿岸図 J. F. G. de la Pérouse 1798年 パリ  
ラ・ペルーズ

la Pérouse (1741-88) は、1785年8月2隻の船を率いてブレスト港を出発、1786年1月大西洋から太平洋に入り、1788年初めオーストラリアのボタニー湾出港後消息不明になるまで、その北部を中心に太平洋海域で探検調査をおこなったフランスの航海者である。

彼はこの航海の途中、立ち寄ったカムチャツカの港から J. B. Lesseps<sup>レセップス</sup> に陸路本国へ報告書を届けさせたが、これをもとに 1798 年、彼の航海記とアトラスが刊行されたのであり、この地図はアトラスの第 15 図にあたるものである。

ところで、この図には la Perouse の航路が示されているが、1787 年、彼は日本海を北上し、大陸とサハリン西岸の間の海域を北緯 5 2 度付近まで達した。しかし、そこから北は昔は航行できたが、今はアムール川からの土砂によって航行は不可能と判断し、針路を南へ転じ、宗谷海峡を抜けてオホーツク海へ出たのである。彼のこの航海によって、従来一つとされてきたサハリンとエゾ（北海道）は分離していることがヨーロッパでも明らかになり、その間の海峡（宗谷海峡）にラ・ペルーズ海峡の名称がつけられたのである。また、今までアムール川河口付近に描いていた島とエゾと一体となった形で描いていた土地とが、一つの陸地サハリンであることも明らかになったのである。ただし、この図では北海道の西半分は不明であり、日本の形もまだ Kaempfer・Scheuchzer 型のまゝである。

なお、この図の北アメリカの部分には、1771 年の S. Hearne<sup>ハーン</sup> のカパーメイン川下流へマッケンジー<sup>マッケンジー</sup> の探検、1789 年の A. Mackenzie によるマッケンジー川から北極海への探検の成果が記されている。

## 前回展観地図解説（「大学広報」No.416）の補訂

### (1) 諸地図の刊行地

- 「アジア図」（作者・年代不詳）—不明（表紙、地図表題はドイツ語）
- 「日本諸島図」（L. Teixeira）—アントワープ
- 「新アジア図」（N. Visscher）—アムステルダム
- 「日本王国図」（P. Mortier）—アムステルダム
- 「68州に区分された日本帝国図」（E. Kaempfer ほか）—ロンドン
- 「シナ・タタール、朝鮮および日本王国全図」（T. Mayer）—ニュールンベルク
- 「アジア図」（Dezauche）—パリ
- 「日本境界略図」（Siebold）—ライデン

### (2) 訂正

6 頁 1 行目 クナシリ島→エトロフ島

8 行目 1754 年の Buache の「エゾ島とその周辺」図→1776 年の Buache の地図。